

日本語教育史研究とその実践 ― 湾生と日本語 ―

教育デザインコース 日本語教育領域

三浦 大明

1. はじめに (目的)

学部時代、体系的な日本語教育の始まりへの興味から日本統治期台湾の日本語教育史研究を開始した。そこでは植民地政策の一環として日本語の普及がなされ、晩期には高い就学率を記録した。しかし、終戦によって中華民国へと復帰し、残された人々は日本語を使用できる環境が消滅もしくは厳しく制限されていた。

そういった戦後の環境の下で過ごしてきた台湾日本語世代は今なお日本語を話すことができる。そこには何があるのか、今何を思っているのか。かつての学習者の声を聞き、彼らの視点から当時の教育や日本語を垣間見ることによって「日本語観」を探ることが私の研究の目的である。

そういった学習者の視点や学習動機を探り知することは、教師という立場には不可欠だと私は考えている。

2. 方法

主に文献調査とインタビュー調査に分かれる。文献は公文書等と先行研究に分かれるが、まず先行研究の一例としては同じようにインタビュー調査をもとにしたものを挙げる。佐藤(2013)「現在を生きる台湾日本語世代の日本語によることばの活動の意味」言語文化教育研究 11, pp391 - 409 では、日本語世代2名に聞き取りを行い、日本語を話す自己認識や話すことによる人との交流を考察している。そこにはやはり台湾社会の政治的な問題が取り上げられている。そういった状況を把握するためにも、台湾政府の公文書や議事録等の収集をさらに行っていく。

インタビューとしては、現時点で日本語世代2名と湾生2名を対象に行っている。日本語世代とは、統治期台湾に生まれ戦後日本へ引き揚げた日本人の呼称である。彼らは当時の台湾を自身の記憶と所持する史料によって教えてくれる存在である。

3. 結果

文献の収集としては、インターネット上に公開されている「總統府公報影像系統 (<http://lis.ly.gov.tw/lgcgi/ttsweb?@0:0:1:presidentdb@@0.6414865460618263>)」から適宜行っている。これは1912年から現在までの中央政府公報が閲覧できるもので、当時の法令の公布等が確認できる。こういった史料により、当時の台湾社会の姿をさらに整理していく。

インタビュー結果として、まず2名の日本語世代はそれぞれ台北・花蓮と異なった都市で暮らしている背景がある。台北在住の方は、小学校で日本語を学び終戦後は使用する機会が少なかったものの現在も話すことができる。そして日本語を話す自身を好意的に誇らしげに思っている様子が見られた。また、花蓮在住の方(以下Kさん)は、戦後役所に勤務し、日本に関する資料・仕事を扱っていたため、日本語に接することが日常的にあったようである。そして、街中の同世代とは日本語で会話をし、誰もそれを咎めなかった。先行研究等からは、日本語に関する厳しい規制がみられたが、どうやら東部では様子が違うようであることが分かった。当時は日本人(湾生)がいなくなったものの、依然彼らや日本語に好意的な思いを持ち、Kさんは日本語をずっと使い続けていた。そんな彼らと再会した思い出は、湾生の方々からも聞くことができた。

4. 考察

以上、文献からは先行研究同様の政治的な面での日本語禁止が確認できた一方で、花蓮といった東部との差異も確認できた。こういった差異の検討は、現在の研究において管見の限りでまだされていない。今後は台北・花蓮といった2都市間で日本語に対する社会的規制の強さの比較と、それによる人々の日本語使用の実態、現在までの軌跡を明らかにし、論文へと繋げていきたい。